



# くば小児科 クリニック

院内報 2008年4月・5月号

## ● 「受動喫煙ゼロの青森県」実現を求めるアピール

5月31日のWHO世界禁煙デーを記念して6月1日に弘前市で開催されたシンポジウムにおいて、次のようなアピールを採択しました。

いま、世界の二十カ国以上が飲食店を含めて屋内完全禁煙になっています。国内では神奈川県で屋内完全禁煙を定めた禁煙条例が制定されようとしていますが、青森県内では健康増進法施行後5年も経つにも関わらず、飲食店、公衆浴場、職場などでの受動喫煙がひどい状態のままです。

公的な場での喫煙規制は、タバコ税増税（一箱千円）、自販機撤去と並んで、喫煙者を減らし子どもを受動喫煙から守る最大の手段です。一見すると喫煙者に厳しい政策は、喫煙者や家族の命を守る喫煙者に優しい政策なのです。

青森県知事 三村 申吾 殿

2008年（平成20年）6月1日

受動喫煙の被害をゼロにするために屋内完全禁煙環境の早急な実現を求めます  
青森県タバコ問題懇談会 代表世話人 山崎照光・鳴海 晃・久芳康朗

5月31日のWHO世界禁煙デーにあたり、青森県タバコ問題懇談会では、青森県民が受動喫煙から守られていない現状に対して、以下の要望を緊急に採択しました。県民の健康と、受動喫煙にさらされないという基本的な人権を守るために、誠実かつ早急に要望を実現されますようお願いいたします。

### 要 望

全ての屋内およびそれに準ずる環境の職場や公共的施設における受動喫煙をなくすために、早急に実効性のある手段（法律・条例）により屋内完全禁煙環

境を実現し、県民の健康を守ること。同時に、葉タバコ農家救済のための転作補助政策を早急に実施すること。

## 根 拠

受動喫煙は重大な健康被害をもたらしており、WHOの推計では全世界で毎年少なくとも20万人の労働者が職場における受動喫煙で死亡しています。2007年のWHO勧告において、例外なく全ての人、全ての職場（飲食店等を含む）に対して、屋内完全禁煙環境を実現することが各国に求められており、同年7月のたばこ規制枠組み条約締結国会議において受動喫煙防止ガイドライン（※）が全会一致で採択され、2010年2月までに実施に移すことが課せられました。国内では、国に先んじて神奈川県で公共的施設における禁煙条例の制定作業が進められています。

また、受動喫煙防止対策は青森県において県民の喫煙率を低下させ、がん死亡率を下げ、健康寿命を延ばすための最重要施策であり、家庭における受動喫煙を防ぎ、次世代への喫煙の悪循環を断つための大きな武器となります。

## ※参考資料

「たばこの煙にさらされることからの保護に関するガイドライン」の主な内容

- 100%禁煙以外の措置（換気、喫煙区域の使用）は、不完全である
- 全ての屋内の職場、公共の場及び公共交通機関は禁煙とすべきである
- たばこの煙にさらされることから保護するための立法措置は、責任及び罰則を盛り込むべきである

（厚生労働省「受動喫煙防止対策のあり方に関する検討会」配布資料より）

## ● 見てはいけない！「人体の不思議展」

東奥日報主催、県教委や県医師会などの後援で「人体の不思議展」が開催されますが、これには各方面から大きな疑問の声が上がっています。

すでに日本医師会（県医師会の上部団体）や学術会議などは、過去の過ちを認め、現在では後援は行っておりません。県医師会でも今回の後援は実質的に間違いであった旨の書状を会員には通知しましたが、後援は取り消されませんでした。県教組でも県教委に対して後援の中止を求めたというニュースも報道されました。（東奥日報には掲載されませんでした）

批判されているポイントについては簡単に紹介しますが、詳しいことは「人体の不思議展に疑問をもつ会」のホームページ（<http://sky.geocities.jp/jbpsg355/>）をご覧くださいだと思います。

まずこの人体標本（死体）は全て中国人だということ。日本国内ではこのような作業を行うことは禁じられています。すべて生前の遺志による献体だと書かれています、その証明を求める質問に答えていません。情報の透明性を求める立場にあるはずの新聞社が、情報を開示せず秘匿しているのです。

また、もし本人の遺志だとしても、多額の謝礼が遺族に支払われたのであれば、見せ物として死体を売ったのと同じことではないでしょうか。主催団体（責任者がはっきりしない団体）はそれを商売にして儲けているのだから、謝礼が支払われたと考えるのが普通だし、それならば死体売りに他ならないと考えるのが普通でしょう。

宣伝の写真にも紹介されている血管標本をどうやって作るかご存じですか。私も詳しく説明できるほどの知識はありませんが、簡単に言うと、血管に特殊なプラスチックを注入して固め、その後に筋肉や骨を薬品で溶かして洗い流し、プラスチックだけが残るというものです。これを聞いただけでも生理的にも倫理的にも許せない気持ちになります。

私たち医師は医学生の際に、実習のために篤志家による献体を解剖させていただきました。それだけに、亡くなった方の身体を興味本位や商売目的で扱うことには、非常な嫌悪感と危機感を覚え、主催・後援の各団体の常識を疑わざるを得ません。

人体を不思議展を子どもたちに見せないようにしましょう。（青森市で開催されるため八戸の子どもたちが見に行く機会は少ないとは思いますが）

## ● 海外渡航者に呈する麻疹対策ガイドライン

日本渡航医学会から海外渡航者に対する麻疹対策ガイドラインが発表になっています。詳しい内容は下記のリンク先をご覧くださいと思いますが、簡単に言うと「全ての渡航者は麻疹対策（主にワクチン）をせずに出国してはいけませんよ」ということです。春の移動シーズンは過ぎましたが、今後予定がある方は参考にしてください。もちろん海外への輸出だけでなく、国内で今年

も続いている麻疹の流行から身を守り、流行の拡大を阻止するためにも、30代以下の若年成人、大学生、中高生には麻疹対策（MRワクチンの2回接種）が推奨されます。

前号にも書きましたが、中1・高3へのMRワクチン接種が始まっています。大学生以上の方はこの接種からもれてしまいますが、過去に麻疹に罹ったことが確実な方を除くすべての方に2回接種をお勧めします。なお、風疹ワクチンとの混合ワクチンですので、女性の方は妊娠している可能性がないことと、2ヶ月間の避妊が必要になります。ご注意ください。

・海外渡航者に対する麻疹対策ガイドライン

<http://www.travelmed.gr.jp/hahsika/hashika.html>

## ● 「キレル」脳：セロトニン欠乏脳

有田秀穂（東邦大学医学部統合生理学教授）

「キレル」現象に関連深い前頭前野腹外側部におけるセロトニン伝達機能の障害を「セロトニン欠乏脳」と呼んでいる。うつ病や自殺は最近20年間で急増しているが、心と体の元気を作るセロトニン神経を弱らせる生活習慣が「軽うつ」の増加の原因になっていると考えられる。

セロトニン神経活性化の要因は、呼吸・歩行・咀嚼などのリズム運動、日照（太陽光）、グルーミング（抱っこやタッピングなど）で、マイナス要因は疲労やストレスである。昼夜逆転でパソコンに向かい身体を動かさないライフスタイルが、セロトニン欠乏脳を作り出す原因となっている。

セロトニン神経は3-6歳で発達し、6歳頃には大人のレベルに達する。セロトニンとメラトニンは昼夜、陰陽の関係で生体のリズムを調整している。

母と子のセロトニン神経を活性化させるために、リズム運動、日光浴、互いに呼吸を感じ合う、スキンシップの四つを提案している。

（平成19年度日医母子保健講習会より）

発行 2008年6月1日 通巻第133号

編集・発行責任者 久芳 康朗

〒031-0823 八戸市湊高台1丁目12-26

TEL 0178-32-1198 FAX 0178-32-1197

<http://www.kuba.gr.jp/>

☆ 当院は「敷地内禁煙」です ☆